



コスタリカの旅を振り返って

藤井真佐子

コスタリカ旅行が充実していたのは**旅行社の田島さん**と**ガイドの五十嵐さん**に負うところが大きい。

田島さんには適切なアドバイスをしてもらった。

「何かテーマを決めておくといいですよ。学校で交流するとか、帰ってきたら報告会を持つとか、写真展を開くとか、文集にまとめるとか：」

私一人では決められないので、会員に集まってもらって検討した。文は末広へ書くことにし、行く前から誰がどこを書くか決めておいた。書く人は特に自分の分担のところはしっかり見てきたように思う。「アドバイスしてもらった全部をやると大変だから簡単に」と思っていたのだが、結局小学校との交流会も持ち、文集もやり（末広）報告会も写真展も九条の会で：と、真面目な私たちは全部こなしした。

コスタリカに行くことになった時、田島さんが五十嵐

さんの書いた記事（「コスタリカに暮らして」A4・8枚）を送ってくれた。この記事で**五十嵐さん**が元小学校教員だったことを知った。五十嵐さんは、新聞でコスタリカについての特集記事―軍隊を廃止した国、元大統領がノーベル平和賞を受賞。兵隊を作る代わりに、教師を作る国。国家予算の3分の1を教育費に充てている。―を読んでコスタリカに興味を持ち、「コスタリカへ行こう」と決めたそうだ。

「コスタリカに暮らして」を読んでコスタリカのことがだいぶ分かった気がした。そこでこの記事をコピーして全員に配った。コスタリカ導入にもってこいだった。

それからしばらくして田島さんから「何か質問があったら出してください」とメールが来た。九条の会の後、会員に集まってもらい、聞きたいことを出してもらった。それを送ったら五十嵐さんから質問への返答がきた。A4・十八枚もあった。読むだけでも大変だった。

このように基礎となる事前準備が出来ていたので、現地ではそれ以外にも疑問がわき深く追求することが出来た。五十嵐さんは質問攻めにあい、特別に質問への答えを言う時間を取ってもらったほどだ。

また、五十嵐さんは今大学院の学生で通訳をしているが「将来は先生を育てる仕事に就きたい。先生が生徒に与える影響は大きい。先生を育てる教育をしたい」と言っていた。

五十嵐さんの話で他に心に残ったこと。それは

「コスタリカの隣の国ニカラグアからの難民が多い。難民は川を渡ってきて川のそばに住みつく。すると子どももいるのでコスタリカでは、教師をそこへ派遣する。小学校も作る。」

この説明には驚いた。他国民だからと追い出すのではなく、教師を派遣し学校も作る！日本では考えられないと思った。

国が違うところも違うものなのか。「よその国の人だから面倒を見ない」ではないのだ。子どもには教育が必要。だから教師も派遣し学校も作る！自分の国だから、よその国だからではない。子どもや人を大切に作る国なのだ。

コスタリカには「愛国心」などという言葉はないかもしれない。あるのは人類愛。

国立劇場近くで私たちに話しかけてきた人がいた。手に何か持っていて何か言っている。五十嵐さんの通訳で「これはおいしい」と近くになっていた木の実を持ってきてくれたことが分かった。何とこの人はおまわりさん。気さくな人。なんて親切な！

この親切なおまわりさんは刺青をしていた。日本の大阪に勤めていたらクビかも！？

国によって見方、感じ方、価値観が違う、それを感じる事が出来るのは海外旅行の良さである。

コスタリカを旅してちよつと心が広くなった気がした。

